

上小出身の名選手「小玉明利」(近鉄・近鉄監督 - 阪神)



<写真：最後列 右から3人目が小玉 明利 上坂部小学校校舎玄関前 昭和28年>

校舎の前で記念撮影するのは、上坂部小学校野球チームとスタッフの面々…その中には、小玉 明利（こだま はるとし）の姿もあります。

小玉は昭和28年当時は神崎工業高校2年生で、新聞で「プロ野球選手募集」の求人広告を見て近鉄パールの入団テストを受けました。入団テストの際、捕手の根本陸夫に打撃の素質を見出され、根本は監督の芥田武夫に「ぜひ小玉を採用すべきだ」と進言しました。芥田は朝日新聞運動部長から前年途中に監督になったばかりで「高校を中退させるには・・・」と躊躇したそうですが、根本は「3年まで待つと他球団に取られる」として強引に口説きました。小玉は「高校中退してプロ入団か」、「進級して高校生活を続けるか」という人生の選択を迫られ、自ら高校を中退して入団の道を選びました。

この写真も昭和28年頃に撮影されたものです。プロ入りしたばかりの彼は、自身も指導を受けた野球チーム顧問からの依頼で、練習のアドバイスのため来校していました。つまり、その時の1枚ということです。

「使い捨ての安ネクタイ」から「高級ネクタイ」へ

小玉は入団当初「周囲の選手を高級ネクタイ、高校中退で無名の自分は使い捨ての安ネクタイ」と自虐していました。ところが、プロ入り2年目となった1954年には、小玉は早くも一軍出場を果たし、三塁手のレギュラーを務めました。弱小の近鉄球団の中で、小玉は入団5年目の1958年に初めての年間3割超え、そして1962年から1965年まで4年連続3割を記録するなど、長きにわたってめざましい活躍しました。

投高打低の時代でプレーしながら打率3割超え6回、1963年から1965年まで3年連続で打率リー

グ4位、打率ベストテン入りを通算9回、ベストナイン選出5回の輝かしい記録を残しています。近鉄は2004年に球団統合によって消滅しましたが、小玉が近鉄で記録した1877安打は、近鉄在籍選手の最多通算安打記録を誇ります。

また実力もさることながら、近鉄では数少ない人気選手だったことは、1957年から1965年にかけて9年連続でオールスターゲームに選ばれたことから明らかです。こと1962年～1965年にかけては、4年連続ファン投票で選出されました。1963年と1965年はリーグ最多得票での出場だったことから、その人気ぶりは絶大でスター中のスター選手だったことがうかがえます。1958年のオールスター第2戦では金田正一から左翼へソロ本塁打を放ち、1963年にも第2戦で金田から左翼へ2ラン本塁打を放つなど、華々しい活躍です。オールスター戦通算打率はなんと.357（42打数15安打）の高打率を残しています。

弱冠31歳で近鉄の選手兼任監督に

1965年からは兼任コーチ、1967年には3年連続最下位に低迷するチーム再建の切り札として、弱冠31歳の若さで選手兼任監督となり、開幕投手に鈴木啓示を抜擢しました。そんな彼も1968年には一選手として阪神タイガースへトレードされ移籍します。阪神時代を同じく過ごした村山実とは幼なじみで1968年から2年間同僚でした。村山は小玉について「もし、彼が神崎工高からそのまま阪神入りしていたら、紛れもなく藤村富美男の後継者としてタイガースは変わっていたかも知れんなぁ・・・」と語っていたそうです。

苦勞の多い兼任監督を務めた影響もあり、選手としての実力は急激に衰え、1969年に通算2000本安打まであと37本という所、34歳の若さで現役を引退しました。もし彼が兼任コーチや兼任監督を務めずに選手として専念していたなら、確実に2000本安打は達成していたでしょうし、選手生命もっと長かったことでしょう。また、もし彼が人気のあるセリーグや球団（当時のパリーグは観客動員数がセリーグの半分程度、近鉄は巨人のわずか7分の1、という不人気ぶりでした）に所属していたら、知名度や活躍ぶりはもっとクローズアップされたことでしょう。

人生は「切り開き」と「出会い」の連続

- ★彼が新聞の求人広告と出会わなかったら…
- ★彼が広告を見ても応募に至らなかったら…
- ★根元の進言がなかったら…
- ★「使い捨ての安ネクタイ」の口惜しさがなかったら…
- ★人気のセリーグ、人気の球団所属だったら…
- ★兼任監督でなく選手一筋だったら…

この上小にも、こんな偉大な名選手がいたとは… 誰が知り得たでしょうか。先輩先人の素晴らしい生き方や功績も、「自ら求めるもの」と「偶然にも出会うもの」の結果とも言えます。しかし、その偶然も自ら求めて引き寄せたことに由来します。「偶然」は「必然」の上に成り立ち、その相乗相互によってさらに広がり高まります。天から大きく見ればそれは「お導き」であって、逆に自分を中心に見ればそれは「切り開き」と捉えることもできます。偉人に限らず、全ての人間の自分史もこの世の社会史も、そういった「導き」と「切り開き」の上に存在しているのかも知れませんね。

<参考文献>

『ベースボールマガジン』2012年7月号 P66-P67（ベースボール・マガジン社）

『近鉄球団、かく戦えり。』 浜田 昭八（日経ビジネス人文庫）

『近鉄バファローズ球団史』（ベースボール・マガジン社）

Wikipedia「小玉 明利」

<写真提供> 尼崎市立地域研究史料館